神と話すことは父親 と話すようなことだ と分かりました。

私はカナダでオプス・デイの存在を 知りました。両親はその国の外交官 でした。そこで、私の将来の夫とな るビクトールと出会いました。彼は スーパーヌメラリオで、当時、スペ イン大使館で働いていました。彼が オプス・デイのことを私に話した最 初の人でした。

両親はカトリック信者でしたが、我が家では、信仰は女性が関わることであるという考えが支配していました。大学を卒業した時、私は完全に宗教的なことから離れていました。私の心に語りかけてくるものは何も無かったからです。

反対に、ビクトールは大変信仰深い 人でした。私が論文を提出するため にローマに戻ろうとしていた時、某 所に埋葬されている一人の大変立派 な司祭の墓所を訪ねて欲しいと私に 頼みました。聖ホセマリアのことだ とは、まるで考えていませんでした。その場所は、私が数年間住んでいたパリオリ地区のブルノ・ボッチ 通りにありました。毎日、その家が、そこが、そこが、そこが、ですが、そこが、ないであると、全喜ばいませんでした。私の婚約者を喜ばれ、ベルを押しました。

ドン・アルバロとの出会い

もう訪れることもないだろうそのよう おいたろうその まして来 見まに目を いって 変 いった の でした。 私 は と し の ました。 私 を と し の ました。 私 を と し の ました。 私 を と し の ました。 な ま だ と 思 の は い し た の 友 達 に い な な も の よ う 達 と な い し に 心 を 打 た れ 、 そ の 司 祭 の お は た の ま し に 心 を 打 た れ 、 そ の 司 祭 の お

名前を尋ねました。ドン・アルバロ だったのです。

家に戻ると、私はドン・アルバの私と、私はドン・れまでのと、私はドン・れまでのといます。これまでそれまでもません。したいといったのというでは、大の大きません。ブルイのは、大の大きまが、そのは、大の大きながいがあれば、大いでで私にいいがあれば、大いではないが始まった。といいないが、一といいないがは、大いでした。

私のオプス・デイとの出会いは、実に神からのものでした。私は何をも心の拠り所とせず、その時その場を生きるという短絡的な考えの持ち主でした・・・私自身の存在を再構築することになったオプス・デイとの出会いは、神を見出すこと、自分の

私にとって、祈るとは教会に入ることでした。オプス・デイを通のたまれるとの会話と成し得るのなこれは革命的りました。神との交の居を見られる。神とのはないことではないました。仕事も家族も、そのの場だったの出会いの場だったのに信仰ともちろん初めのうちは、常に信仰心

を保つことに努力を要しました。神 と話すことは、父親と話すようなこ とだと理解するまでは。私にとっ て、神と共に居ることは、神と語り 合うことです。

二つの専門職への召しだし:精神科 医と主婦として

もし私が研究職に携わることができ なかったなら、幸せではなかったで しょう。また、心理学という私の専 門分野に関わらなかったなら、やは り幸せではなかったでしょう。私 は、いつも同じ熱意を持って心理学 に専念できたのではありません。家 族が私を必要としていた時期や、夫 について行き、別の場所でゼロから 始めるために私の仕事をやめなけれ ばならなかった時期もありました。 さらに、大人数の家族の母親とし て、たくさんの問題を抱えていまし た。勤めに出たり、長時間仕事をす るなどの如何なる専門的な仕事にも

就くことはできませんでした。ロー マでもバルセロナでも、私個人のオ フィスを持って、都合がつく時間に 仕事をしなければなりませんでし た。イタリアでは一人のカタルー ニャ人の神経・精神科医と一緒に仕 事をしました。バルセロナでは当初 はクリニックで働き、いろんな仕事 をし、一人の精神科医と一緒にオ フィスを開くまでに至りました。今 それは、診療所の規模になりまし た。子供から高齢者まで、精神医学 や心理療法の分野で、たくさんの人 と対応することができます。

私はいつも、私達がしていることは 専門職ではなくて使徒職なのだと 言っています。個々人に応じた具体 的な対応をし、その人に安らぎを与 え、元気づけることができる、特別 の素晴らしい使徒職です。それは、 外に表れる仕事ではありませんが、 大きな喜びがある仕事です。

人は様々なレベルで行動できます。 良い教育は人を向上させるための土 台です。良い教育を受けることで、 人は価値について理解し、人格を再 構築し、自分の生き方を方向付けて いくのです。単に人間的な見地から でもそう言えます。ある人の人生に ついての思考を妨げるような精神的 疾患がないのであれば、また、初期 段階に限られるとはいえ、この種の 仕事がその疾患に対処し得るなら、 大変役立つことです。調和がとれて いる人なら誰もが、常に神の真理に とどまり、与えられた命の可能性、 すなわち、まだ開かれていない能力 を切り開いていけるでしょう。

人間の自由は尊重されねばなりませんが、もし私に心を開こうとし、そして開くことができたなら、 - たくさんの人が心を開いてくれますが一私はまた、霊的な面にも関わることができます。人間の生を形成する部分だからです。人間の生を形成する

子供達の形成

私達の子供達のおかげで、私と夫は たくさんのことをすることがでとと した。世間でよく言われることと 反対に、大人数の家族であることと が、私達の能力を増してきたのことが。 家族のために働き、働らでとしまって能力を増してきたからことで、よって よって能力を増してまた私達二人に 求められた努力をすることで、なし 得る限り自身を向上させることができました。私達は、もっともっと楽な生活を送ることができたでしょう。しかし、人間的資質をここまで高めることはできなかったでしょう。

子供達を教育するために大切なこと は人格形成です。どの面で自分を変 えたいか。朝目覚めた時、鏡に誰 (どんな自分)を見たいか。品位が あり寛容で人格的調和のとれた人物 を見たいですか? ならば、そのよう な人格形成をしましょう。そのよう な人格形成ができている人を見るこ とは、素晴らしいことです。子供達 は、その両親の姿を完璧さの証では なく、戦いの証として受けとめるで しょう。常に過ちをおかす可能性を 持ちながら、再度やり直していく戦 いなのです。これらのこと全てをオ プス・デイの精神に学び、そのよう に生きようと思っています。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shen-tohua-sukotohafu-qin-tohua-suyounakotodatofen-karimashita/(2025/12/19)